

春風・ピンチ・なう

アリセ・ハルカゼ・プロジェクトその①

県境の山間を縫うように通るワインディングロード。街灯の灯りしか光源のない薄暗い道を赤いレクサスが青いテールライトの軌跡を残して走り去るのを少女は長い黒髪をかきながら見送った。

「この格好で一晩歩くのかぁ」

そしてすっかり車が見えなくなってから自分の服装、真っ白のドレスに白いハイソックス、白い厚底靴をみて溜息を吐き、ゴスロリ高校生有瀬春風は現状と今後について考えることにした。

事の発端は OG の先輩からの一斉メールだった。週末に隣県で行われるお披露目会に参加してみないか、車で行くしご飯もおごるからお金もかからないとの事だったのではいはい釣られてしまったのだ。他の同級生が誰も来てないことに疑問を抱いていたのだが、お披露目会が終わってからその理由が分かった。そのまま打ち上げということで飲み会に同伴することになったのだ。一次会は食べ物メインの店でまだよかったのだが二次会がバーだったので流石にまずいと思い切り上げることにし、先輩のパシリ 2 号とかいう人の車で送ってもらうことになったのだが、

「やらせなきゃ降ろすとか、、普通は本当に置いてかないだろうよ」

有瀬春風は処女である。純潔を失うことで自分の高貴さも失われる気がするのである。『乙女は常に毅然とあれ』母のその言葉その 1. を実践した彼女は車から無言で降り、レクサスはそのまま走り去った。そして山中に一人取り残されてしまったのだ。

これから彼女がどうするかであるが、とりあえず歩いて麓まで歩いてファミレスかネカフェで始発を待つしかない。問題はその距離である。

「えっと、、トイレに寄ったコンビニから山道を抜けるのに 30 分くらいかかって、車の速さが看板によると時速 50 キロだから、、この山道は 25 キロくらい続くんだけど、ここが多分半分くらいだから 15 キロくらい歩けばいいとして、人の歩く速さは時速 10 キロから一時間半くらい歩けばいいのかな。なんだ、意外と近いじゃん」

間違っている計算で見積もりを出した少女は薄桃色の手提げを取り、鼻歌交じりに都内へと続く道を歩き始めた。

「ありえないありえないありえない」

最初の余裕は消え、鼻息荒く有瀬春風は歩を進める。歩き始めてもう一時間以上経つが未だに上り坂が終わらないこともそうだが、それ以上に彼女の前を走り抜けたトラックが彼女の前で止まるどころか寧ろ速度を上げていったことに腹を立てていた。

「ふつうこんなかわいい女の子が歩いてたら喜んで車を止めてくれないかな。気づいてもらえないとかほんと私ってついてない。」

そんなことをぶつくさ言いながらカーブを歩く彼女の前に一縷の希望が目についた。山の

ほうに伸びた脇道の前に数台の車が止まっている。きたこれ、と声をあげ車のほうに走って近づいたが、見覚えのある赤い車が止まっていることに気づき再び肩を落とした。よく見てみるとほかの車もドライバーが容易に想像できるような『お洒落な』ものか、本当に動くのか疑ってしまうような古びたものしかない。さらに付近に人の気配がないこともまた彼女の落胆に拍車をかける。人が入っていったであろう脇道に入っていくのも誰かが戻ってくるのをこの場で待つのもあまり得策とは思えないし、これ以上歩くにはくたびれてしまいしんどい。そもそも夜遅くに山奥に入っていく理由とはなんなのだろうか。犯罪、集団自殺、危険な憶測がいくつも彼女の脳裏に横切り一つの結論に至る

「もしかして・・・乱交」

有瀬春風は処女である。しかし周りの大半は経験済みだしピンクな話に興味があるお年頃である。むしろ経験がないからこそリアル以上に過激な妄想をしてしまう。

「どうしようどうしようどうしよう。超やばいじゃん。数人の男に取り囲まれて身動きが取れない状態であんなことやこんなことをされたら。そのあと・・・ひう」

急に後ろから肩を叩かれてつい変な声を出してしまう。恐る恐る振り返ると厚手の Y シャツの中年男性が訝しげな表情で春風を見ていた。

「お嬢ちゃん、こんな時間にこんな場所にそんな恰好でどうしたんだい」

「え、え、え、と私初めてでそういうこともするつもりじゃないんですけど、その・・・」未だに妄想から抜け出せずとんでもないことを口走っている少女を制し男は再び話を始める。

「混乱しているようだね。私はこの辺りを管理している三鳥というものだ。何もしないから君のことを話してくれないか」

「あ、私、有瀬春風って言います。その派手な車の持ち主に送り狼されそうになって歩いて帰ることになったんです。本当に変なことをするつもりはないんです」

「それは大変だったね。その大学生はきっと奥で用でも済ませてるんじゃないかな。」

「できればあいつとはちあいたくないんで車でこの先のコンビニまで乗せていってもらえませんか」

「残念ながら車は遠くにあるから今すぐ送っていくのは無理かな。とりあえず近くに小屋があるからそこで休まないかい。私はもう年だし君が考えているようなことをする元気もないからあんしんしてくれたまえ」

最後の一言に顔を紅潮させ春風はぶんぶんぶんと首を縦に振る。そして歩き始めた三鳥の後ろについて森の奥へと入っていった。